新ノフア（語）
基礎的文法

第二案第三改正版

by wakmona

言語の設定

本来、Enilarefine の公用語は、Ilarenig が話す言語、古イラレニク語（qrxinb Ilarenig ni noqA、SOV/AN の膠着語）だった。しかし、Enilarefine が mognifine へと進化する過程で、Arqenig 商人・貴族の国内での影響力が増し、経済のみならず、文化にまで作用することとなった。その影響は言語にまで及び、古イラレニク語は変質したり、衰退したりした。

各地域で、Arqenig の言葉と古イラレニク語、そしてその両者のピジンやクレオール言語が混在している状況を見かね、せめて学術上だけでも統一した言語を用いようという動きが広まった。そこで、各大学や学事賢人（文科省大臣）が中心となり、新しい言語（nawinbnoqA）、通称「ノフア語」が制定された。

文法は Arqenig の言葉寄りで、単語や造語法は古イラレニク語というこの言語は、当初の目的通り、初期には学術上の言語としてのみ用いられた。しかし、王府内や大学内、更には下級の教育機関内でも多数の言語が混在している状況のもと、ノフア語は官吏や生徒同士が日常会話を交わす為の、共通の第二言語としての役割を勝ち得た。時代は下り、今や一部の貴族のみが用いる古イラレニク語を、ノフア語は完全に駆逐した。

音・文字

ノフア語は、5 つの母音と 18 の子音からなり、原則的には開音節構造（v、cv）をとる。
nb（日本語のンにあたる）や、一部動詞で語尾の母音が弱化し、閉音節化することもある。

母音

キナワ文字	アルファベット転写	音声表記	補足
ᥙ	U	ɯ	語尾の場合、弱化することがある。また、接辞により U に他の母音が連続する場合、U は w に変化する。
ᥢ ᠄	I、i	ɨ	
ᥓ ᠂	A、a	a	
ᥤ ᠅	E、e	ɛ	
ᥣ ᠈	O、o	o	

ノフア語で用いられている文字（nawinbkinawa）はいわゆるアブギダ体系の文字である。
子音が単独で存在する場合は u 音（ウ段）として読み、母音が付随（線上の母音記号）する場合はその母音の段で読む。そのため、母音が単独で発音される場合は母音記号ではなく、母音文字を用いる。アルファベット転写では、母音記号を小文字、母音文字を大文字で表す。

例　noqa は「ノハ」だが、noqA なら「ノフア」になる。

ᥒᥲᥛ᠆ の様に、n の後に続く点は撥音記号であり、n と併せて「ン」と読む。アルファベット転写では b を用いる。

母音はそのまま、子音はウ段が文字自体の名前となる

子音

文字	転写	音声	補足
ᥐ	s	s	[θ] でも可。
ᥑ	x	ʃ	
ᥒ	r	ɾ、ɽ	旧来は[ɽ]であり、l と区別していた。 現在は区別せず、[ɽ]や[r]寄りの発音も許容。
ᥓ	t	t	
ᥔ	c	ʦ	
ᥖ	z	z	

ᑭ	q	ç	旧来は[x] であり、現在でも[x] は許容される。 日本語的な感覚から[h] 、[ɸ] （[f] ）と混同しないように。
ᑲ	w	w	自由異音として[ɯ]
ᑦ	y	j	
ᑯ	l	ɾ	現在ではr との区別なし。
ᑫ	p	p	
ᑫᒪ	f	f	[ɸ] でも可
ᑐ	n	n	n は語の最初・最後以外では「nɯ」ではなく、「ɴ」で発音されることが多い。
ᒍ	k	k	
ᒃ	m	m	
ᒪ	v	v	日本語の「バ行」とは異なり、[b] ではない。
ᑯ	d	d	
ᑲᒪ	g	ɡ	単語（複合語の場合は、各構成語）の終わりに来るg は、[kɯ]で発音することが一般的。

文字	音声	補足
r（u 音）の後にr あるいはl	r	r(u)が脱落ないしは弱くなり、後続するr あるいはl がふるえ音に変化する。

補助文字

文字	転写	
ᐧ	b	n の後につき、撥音化（ん）する。[ɴ]や[ŋ]等のいずれかに変化。

その他記号

記号	相当記号	意味・用法
ᐧ	コンマ	語や節を区切る。用法は英語と同じ。
ᐧ	ピリオド	文の終わりにつく。
ᐧ ᐧ	「」	会話文をくくる。

二重母音

開音節構造であり、連続する同一母音が長母音化する以外に二重母音は存在しない。

語順

ノフア語はSV(I)O/AN語順を原則とする。しかし、語順は厳格ではなく、入れ替えることも可能。通常語順と異なる場合には必ず格マーカー（格助詞）を必要最低限数用いなくてはならない。

通常語順の場合、格マーカーは必要ではない。通常語順で格マーカーを使うことは、その格を強調することとなる。

例
Er tarete Ine　私はそれを食べた
Ersa tarete Ine　私は（が）それを食べた
Er tarete Ineto　私はそれを食べた

形容詞（名詞を形容するもの）は必ず名詞の前に置かれる。

例
talinb noqerta　基礎的文法

名詞

ノフア語における名詞には主格、所有格、与格、対格の４つの格がある。この４つから外れる物は全て副詞、あるいはいずれかの節の一部である。

主格

主格は動作の主体や、文中でのトピックとなっている名詞である。
基本的には語に何も付随させず、そのまま用いる。倒置した場合や、強調する時のみマーカー-sa を接尾させる。

属格（所有格）

属格は日本語の「～の」にあたり、主に所有を表す。
格マーカーは-ni であり、語尾に必ず付随する。
形容表現に用いることもできる。

例　xawani waxi（赤の服）＝xawinb waxi（赤い服）

与格（間接目的格）

与格は日本語の「～へ」や「～に」にあたり、間接目的格とも。動作の非直接的な受け手を示す。
格マーカーは-ne であり、接尾する。しかし、対格の前にくるという原則から、格マーカーをつける必要はないし、詩や歌における文学的表現以外で用いられることは滅多にない。これは、-ne とは別に前置詞 ne が存在する為。

例　Er tomete kaU fodo（私は彼に食糧を与えた）
　　Er tomete ne kaU fodo / Er tomete kaUne fodo（私は彼に食糧を与えた）
動詞 tom（与える）の目的語は「与えられた物」であるため、fodo（食糧）が直接の目的格であり、その食糧を与えられた者である kaU（彼）が与格となる。

対格（目的格）

対格は目的格とも呼ばれ、動作の直接的な客体を表す。
指示マーカーは-to。必ずつける必要はなく、節等が続く際に分かりづらいと思ったらつける程度でよい。
動詞の項目でも述べるが、ノフア語においては他動詞が動詞の基本形である為、対格は大いに重要なものとなっており、その範囲も広い。基本的には動詞に対して「何（誰）を、何処で、何処に」とい

った疑問に答える形を取るものは対格である。

※前置詞を用いた目的格表現について
例として、英語の"I go to the park"を挙げる。この文は英文法的に解釈すると、SV＋副詞句（副詞句：前置詞＋前置詞の目的語）という構成である。しかし、ノフア語では他動詞原則から、副詞句である"to the park"は動詞"go"の目的語となる。なお、"I go to the park"の場合、他動詞原則から"go"は「何処へ」を対格として取ることが決まっているので、前置詞 to（ノフア語 ne）を抜いても構わない。

例
Er wikete Inexa farezi　私は昨日そこへ行った

複数を表す場合は語尾に-(h)la をつける。
例　私 Er→私達 Erla

敬意、尊敬を表す場合は語頭に ma(h)-がつく。人名・人称代名詞にはつかない。
例　息子 som→御子息　masom

なお、目上の人物（神含む）には一貫して敬称-(h)maE を用いる（語尾に接続）。
例　神様 nagimaE　あなた様 AnemaE

代名詞

人称代名詞

ノフア語における人称代名詞は、英語の様に格変化をしない。

[redacted]	中性・無性	男性	女性
一人称	Er	[redacted]	[redacted]
二人称	Ane	[redacted]	[redacted]
三人称	kaIg	kaU	kami

非公式の人称代名詞

公の場・文章では用いられないが、日常会話レベルで用いられる人称代名詞。

一人称	ra（俺、男性的）、me（私、女性的）
二人称	zar（お前）
三人称	ziIre（あいつ）

指示代名詞

ノフア語における指示代名詞は二つのみである。
人称代名詞と同じく、格による変化はせず、接頭語・接尾語を用いて意味を指定する。
指示形は代名詞に分類したものの、実体的にも文法的にも形容詞である。

koI

指示形	主体・目的形	場所形
koIno	koI	koIxa

代名詞 koI は近方にある事柄、手元にある事柄について述べる時に用いる。日本語の「この、これ」、英語の"this, it"にあたる。
指示形は付随する名詞を指し示す時に用い、主体・目的形は代名詞が単体で動作の主体・客体となる時に用いる。場所形は単体で　koIno 場所　の意味を成す場合（日本語のここ、こちらに相当）に用いる。

Ine

指示形	主体・目的形	場所形
Ineno	Ine	Inexa

代名詞 Ine は遠方にある事柄、手元から離れた事柄（自分の手の届かない）について述べる時に用いる
細かい用法は koI と同じである。

なお、ノフア語では代名詞脱落が認められている。
形式主語は存在しない。

疑問代名詞

英語の 5W1H にあたり、疑問文を作る代名詞は疑問語幹 qen を変形させたものを用いる。

人物	主体・目的	時間	場所	理由	状況・手段・様態
qenig	qen	qentoI	qenxa	qenrE	qenanb

これら疑問代名詞は英語の指示代名詞の様に、格による変化をしない。
日本語の様に「誰か」等の不定であることを示す為には用いず、あくまで疑問文（質問する場合や不確証な場合）でのみ用いる。名詞節関係詞を疑問代名詞の代わりに用いることは可能。
状況・手段・様態の qenanb は感嘆文を導入するのにも用いられる。

英語と違い、疑問文であっても文形（語順）は平叙文と変わらない。

例　qenig yenb qar Er（誰か私を助けてください）×
　　qenig qarete Ane（誰があなたを助けたのですか？）○

疑問代名詞以外にも、疑問文は疑問文マーカーkeの存在により構成される。
疑問代名詞と疑問文マーカーの両方は必ずしも必要でなく、疑問代名詞が使われていれば疑問文マーカーは省略することができる。語順は比較的に自由。詳しくは文の種類・文型の項目を参照。

不特定代名詞

指示代名詞の様に特定の事柄を指示するのではなく、あくまで不特定の事柄（全て、いくつか、何れか等）を表す時に用いる。その特性から、副詞としても用いられる。

基本形	意味	人物形	主体・目的形	時間形	場所形
Ule	全て	UleIg	Ule	UletoI	Ulexa
Af	不定	Afig	Af	AftoI	Afxa
nane	否定・皆無	nanig	nane	nanetoI	nanexa

Uleは「全て」を意味する。人物形は「皆」、主体目的形は「全て」、時間形は「常に」、場所形は「至るところ」の意味である。英語の"every~"相当。
例　UleIg wikete Inexa farezi（昨日は皆そこへ行った）

Afは「不定、何れかの」を意味する。日本語においては助詞「か」で表現されることが多い。人物形は「誰か」、主体目的形は「いずれか」、時間形は「いつか」、場所形は「どこか」を意味する。
この不定代名詞は、「若干・多少」を示す副詞AIfより分離したものである。
英語の"some~"相当。
例　Afig wikete Inexa farezi（誰かが昨日そこへ行った）

nanは「否定・皆無」を意味し、否定文を作る。この代名詞を用いた場合、文が肯定の形であっても、意味は否定となる。
英語の"no~"相当。
否定呼応は無いので、否定代名詞と動詞の否定形を両用する必要はない。
両用（二重否定）は強い否定を表す。
例　nanig wikete Inexa farezi（昨日は誰もそこへ行かなかった）
　　nanig na wikete Inexa farezi（昨日は決して誰もそこへ行かなかった）

再帰代名詞

名詞・代名詞が重複する（私は私を、彼は彼を等）のを防ぐため、再帰代名詞 Enb が用いられる。再帰代名詞は「動作の直接の実行者」を指す。
Enb は絶対に与格か対格のどちらかである。動詞の間接目的語・目的語として使う場合はそのまま用い、「自ら、一人で（に）」といった副詞的表現をする場合は接尾辞 lik をつけて副詞とする。
再起動名詞は、絶対自動詞の表現にも用いられる。詳しくは動詞の項を参照。
例　Er sdarete Enb（私は自らを座らせた→私は座った）

動名詞

ノフア語では、動詞の現在形に接尾辞-ko をつけることで、動名詞とすることができる。
自動詞（化された他動詞）は現在形の代わりに過去形を用い、再帰形動詞（絶対自動詞）は現在形で、接尾辞-ko の代わりに-enbko を用いる。
se という語から始まり、動名詞で終わる一連の語を動名詞句と呼ぶ。se と動名詞の間には、その動名詞を成している動詞の目的語が入る。
例　se yarlik laxezenko sas katinb（早く起きることは難しい）

能動名詞

動詞 A＋接尾辞-ta で「動詞 A（を）するモノ」という意味の名詞を作製可能。
例　切る kic→ナイフ、小刀 kicta
　　殺す nokr→殺し屋 nokrta

受動名詞

動詞 A＋接尾辞-ame で「動詞 A（を）されるモノ」という意味の名詞を作製可能。
例　食べる tar→食べ物 tarame
　　捧げる Efer→供物、捧げ物 Eferame

数詞は名詞ではなく、形容詞である。

形容詞

原則として、形容詞は名詞の前に置かれ、続く名詞を形容する。
形容詞は-i(I)nb で終わるのが基本形である。多くの形容詞は、名詞や副詞に-i(I)nb をつけて形容詞となっている。
※副詞の場合は副詞形の-lik を取り除いたものに-inb を付ける。
名詞や副詞から形容詞を作った場合は「その性質を持った」といった意味合いに成る。
例　xawa 赤→xawinb 赤い

名詞＋nanb で「（名詞）ない」という表現になり、名詞＋mar で「（名詞）ある、（名詞）が多い、（名詞）を持った」の意味になる
例　formnanb koniq 形無き世界　formmar koniq 形有る世界

なお、繋辞を含む動詞の目的語（対格）になれる。厳密に言うと、形容されている名詞が省略されている。数詞が形容詞とされるのはこのため。
例　Er tarete xe（私は二つ食べた）→xe には「皿」や「切れ」等の語が続くが、それが省略されているので、本来は形容詞である数詞が名詞様にふるまう。

比較級、最大級は存在しない。
比較であれば前置詞 nenb を用い、最大級なら mota を用いる。
例　kaU sas moginb nenb Er（彼は私より大きい）
　　kaU sas mota moginb（彼は最も大きい）

序数は数字に接尾辞-nim を付ける。（～番目の）
数助詞（日本語の「一つ、一本、一丁」の「つ、本、丁」等）は存在しない。
数＋lik で順番を表す副詞となる。（～番目に）

数詞

数	キナワ数字	読み/文字表示
0	0	naI
1	i	If
2	B	xe
3	F	teI
4	H	fe

5	J	kor
6	b	meq
7	L	nem
8	†	ye
9	j	keI
10	i0	to
11	ii	toIf
21	Bi	xetoIf
100	i00	fam
101	i0i	fam Onb If
121	iBi	fam Onb xetoIf
1000	i000	tina
1121	iiBi	tina fam Onb xetoIf
10000	i0000	yar
12254389	iBBJHF†j	tina fam xetokor yar fetina teIfam Onb yetokeI

基本的には文字ではなく、数字で表記する。

副詞

副詞は動詞、形容詞、副詞を修飾する。
単純副詞には状態（様態）、程度、頻度、日時の四種類がある。

状態副詞は主に動詞につき、動作がどの様に行われたかを表す。
状態副詞は通常、修飾する語の前、後ろ、文末に置かれる。
倒置的表現で、文頭に置くことも可能。
一般的に動詞より後ろに置かれることが多い。
例　qera wik yarlik（はやく行け）

程度副詞は主に副詞、形容詞、そして一部の動詞につき、その程度や度合いを表す。
修飾する語の前にくる。
例　とても wari
　　過度に neI

状態副詞、程度副詞は多くの場合、名詞あるいは形容詞から接尾辞 i(I)nb を除いたものに接尾辞-lik をつけたものである。当然のことながら、接尾辞が無い副詞も存在する。
既存の名詞・形容詞を変形させて新たな副詞を生成することも可能。

頻度副詞は主に動詞につき、その動作がどの程度の頻度で行われるかを表す。
常に layez、しばしば mafez、稀に sarez、絶対に navez（～しない）、fetolik（たまたま）等。
用法としては状態副詞と同様。
動詞の前、あるいは文末に来ることが多い。

日時副詞は主に文頭、文末、動詞の後ろにつき、いつ動作が行われたか・行われるかを表す。
昨日 farezi、今日 nimati、明日 fatozi の様に具体的な日時を表すものと、～の前 fare、今 nima、～の後 fato の様に関係を表すものがある。
指示代名詞+名詞（例　koIno yir→今年）という構成で副詞句を構成することも可能。また、数＋-lik で「何番目に」を意味する副詞となる。

英語的な文法から考えると、「時間」と「場所」を表す事柄は副詞だと考えがちだが、ノフア語では「行く」「歩く」等の動詞に「場所」が対格となり得ること（他動詞原則）に注意。

また、オノマトペも副詞の一種である。

動詞

ノフア語における動詞は、古イラレニク語における語尾活用が「助動詞」として分離した為、大分シンプルになっている。

全ての動詞の基本形（現在形）はu音（u段)で終わる。なお、分詞と不定詞は存在しない。
日本語における「名詞＋する」という形の動詞（例　感謝する）は殆ど存在せず（動名詞は例外）、英語の"thank"の様に一語で表す動詞が一般的である。

繋辞

ノフア語では繋辞（A=Bの形を表す動詞）としてsasが用いられる。
日本語の「なる」、英語の"become"という表現はsimを用いる。
しかし、繋辞とは言っても（後述するが）sasは他動詞である為、A sas B表現のBは主格補語とは成り得ない。あくまで、Bは対格である。
英語の様に、補助動詞としての使い方はない。
例　he is eating a pieのisは動詞eatingにかかり、進行形・非過去を表す補助動詞である。ノフア語では単に進行形の動詞接尾辞-emを用いるので、be動詞は補助動詞として使用されない。

一人称単数の代名詞Erと二人称単数Ane、三人称単数のkaIg、kaU、kamiと繋辞が結びつき、それぞれEras、Anes、kaIges、kawas、kamisという語を作る（英語のI`m等に相当）

身分上や場所の存在表現は繋辞でなく、動詞merやmecを用いる。
その際は、前置詞neが用いられる

例　私にはAがいる　A mec ne Er
　　AにはBがある　B mer ne A

※単純所有は動詞kof、場所の単純言及はneの代わりにtaを用いる。
例　私はAを持っている Er kof A
　　AはBにある A mer ta B

動詞の他動詞原則

ノフア語において、全ての動詞は原則として他動詞である。
走る、居るといった動詞も対格（どこで、どこに、どこまで等）をとる他動詞である。
動詞wik（行く）の様に、対格が「～へ、～に、～まで」の形を取る場合、同じく「～へ、～に、～まで」の意味を動詞に付加する前置詞"ne"は省略できる。重複させることは可能。（その場合、強調表現

となる）
しかし、文脈上明らかな場合は、主格共々、省略が可能。

ちなみに、「雨が降る」は「xime fozem xiwm（天は雨を注いでいる）」と表現する。通常、xime 天は明らかなので、省略される。

他動詞の自動詞化

日本語における他動詞に対しての相対自動詞（例　落とす→落ちる、混ぜる→混ざる）は存在せず、他動詞形のみ存在する。自動詞表現（彼は落ちた）を表現するには、自動詞化したい他動詞を過去形にし、sas の対格とする。受動態表現は助動詞を用いるので混同はされない。
また、日本語の「開く」等の他動詞・自動詞両方の使い方ができる動詞は、他動詞のみの意味で捉える。

寝る、起きる等の日本語における絶対自動詞（対格を絶対取らない）も他動詞であり、再帰形を用い、つまり再帰代名詞 Enb を用いて自動詞形を表現する。絶対自動詞の再帰代名詞は、必ず動詞の直後に置かれる。

例　Er Ef Enb→私は寝させる自らを→私は寝る。

しかし、自分が対象である場合、通常は Enb を省く（＝自分が対象の場合は無標である）

例　一人称平叙文の場合、動詞 sdar は「座らせる」の意味だが、E sdar は「私は（私を）座らせる」、つまり「私は座る」だととる

再帰動詞（の再帰形）と命令・使役形・依頼形を重複させることは可能。その場合、自発的に動作をさせる、というニュアンスになり、より丁寧な言い方となる。

ちなみに、死ぬ nor は「どこで、いつ」と言った対格を取る他動詞である。しかし、通常は対格を省略する。

助動詞は本動詞の直前につく。つまり、自動詞表現であれば助動詞は be 動詞の前につく。

動詞が U で終わる際、接尾辞が母音で始まる時は動詞の最後の U が w へと変わる。

時制（テンス）

過去形（完了形と進行形接尾辞をつけて表現する。何も接尾しなければ現在形である。

全ての動詞は、ただ単純に接尾辞をつけるだけでよい。英語の様に屈折はしない。

過去形、完了形	現在形	進行形
-ete	（接尾辞無し）	-em　※１

現在完了形、過去進行形などの時制と相を同時に表す場合は相詞を用いる。
qmecemete 住んでいた、taremete 食べていた等、過去進行形は-emete を用いる
未来形は存在しない（不確定な未来の事項は、推量の助動詞を用いる）

相（アスペクト）

相とは述語が表す事象の完成度や進み具合を表すものである。
ノフア語では、完結予定相、未然相、起動相、継続相、進行相、終止相、の６つがある。
それぞれの相は対応する相詞を動詞の前（助動詞がある場合は助動詞と動詞の間）に置くことで表現する。

相詞

完結予定相	未然相	起動相	継続相	進行相	終止相
無し	name	Ase	qase	-em　※１	nete

完結予定相
ある動作が行われ、それがいずれ終止することが示唆されていることを表す形式。
他の相詞の無い現在形の動詞は全て完結予定相である。
相詞はない。

未然相
ある動作がまだ行われおらず、その動作をしようとしていることを表す。
日本語の「～しようとしている」、「～しようとする」構文に相当

起動相
ある動作を丁度始める形式。
日本語の「～し始める」、英語の"began to"構文に相当。

継続相
ある動作を動作主が「続けた」ことを示す形式。
日本語の「し続ける」、英語の"kept~""continued to"構文に相当。
継続・習慣を表すのにも用いる。

進行相
ある動作が進行中であることを示す形式。
日本語の「～ている」、英語の"~is~-ing"構文に相当。
※進行形と進行相は文法上の区別はない。相詞もなく、接尾辞を用いる。

終止相
ある動作が終了したことを示す形式。
日本語の「～し終える、～し終えた」、英語の"~finished~"構文に相当。
過去形の動詞は、終止相であるとみなす。終止相＋過去形は「過去完了形」である。

敬意の表示
本来、学術言語として制定されたノフア語では敬語が存在しない。
敬称や敬意の mah-も後世で民衆に広まってから使われ出したものである。

動詞においても、古イラレニク語における動詞の助動詞 reU に相当するものはないが、他の助動詞（依頼要請、許可要請等）である程度の敬意は表現できる。

神・王に対する尊敬語として、動詞の後に接辞-ro を用いることもある。

動詞に類似した・関係する準品詞

動副詞（副動詞とも）
動詞を変化させ、副詞としたもの。動詞を修飾し、複合動詞の様な形になる。
修飾する動詞の直前につく。
現在形→動詞現在形に-i をつける。「～しながら」の意味。
日本語の「分け隔てる」「切り刻む」等
過去形→動詞過去形に-I をつける。「～してから」の意味。
日本語の「破り捨てる」等

動形詞（形動詞とも）
動詞を形容詞として用いたもの。名詞、代名詞を修飾する。
用法は形容詞と同じであるが、接尾辞-i(I)nb は付かない。
スラブ系言語と異なり、助動詞（可能や受身等）まで含んだ動詞句全体を形容詞化けすることができる。
日本語の「働かざるもの」等の表現もできる。

助動詞

助動詞は動詞の前につき、態（ヴォイス）と法（モダリティ）を定める。
動詞の前に位置する。　※命令の助動詞のみ、動詞の後ろにつくことが可
単体では、全ての助動詞は「肯定形」である。否定・打消の副助動詞 na（nah-）が助動詞の前に置かれると「否定形」となる。

	肯定形	肯定形の意味	否定形	否定形の意味
希望度に関する助動詞				
希望・欲求	yanb	～したい	nahyanb	～したくない
願望	yate	～します様に	nahyate	～しません様に
許可要請	yane	～させて下さい	nahyane	～させないで下さい
依頼・要請	yenb	～してください	nahyenb	～しないでください
必要性に関する助動詞				
許可・可能　※１	qanb	～できる・～してもよい	nahqanb	～できない
提案	qate	～したらどうか	nahqate	～しなければどうか
使役提案	keqate	～させましょうか	nahkeqate	～やめさせましょうか
自発提案	reqate	～しましょうか	nahreqate	～やめましょうか
好転	qane	～した方がいい	nahqane	～しない方がいい
適切	qenb	～すればよい	nahqenb	～しなければよい
当然	qete	～すべきだ	nahqete	～すべきではない
義務	qene	～しなくてはならない	nahqene	～してはならない
命令　※２	qera	～しろ	nahqera	～するな
可能性に関する助動詞				
可能性	zanb	～するかもしれない	nahzanb	～しないかもしれない
推量	zate	～するだろう	nahzate	～しないだろう
推定	zane	～するらしい	nahzane	～しないらしい
伝聞	zenb	～するそうだ	nahzenb	～しないそうだ
確実	zete	きっと～する	nahzete	きっと～しない
期待度に関する助動詞				
後悔・残念	canb	～してしまう	nahcanb	～してしまわない
反予想・反期待・反通念　※３	cate	～するも	nahcate	～しなくとも
好意・期待帰結　※４	cane	～してくれる	nahcane	～してくれない

意思に関する助動詞				
意思	tanb	～しよう	nahtanb	～しないでいよう
勧誘	tate	（一緒に）～しましょう	nahtate	～しないでいましょう
その他の助動詞				
使役　※５	kenb	～させる	nahkenb	～させない
使役受身	rekenb	～させられる	nahrekenb	～させられない
受身	renb	～される	nahrenb	～されない
仮定	denb	～すれば	nahdenb	～しなければ
尊敬	reU	～される	×	×
交互　※６	naU	～しあう	nahnaU	～しあわない
打消・否定	na（nah-）	～しない	×	×

※１　　例　食べても良い→(Ane) qanb tar (koIto)
第二者に対して可能の意味で用いることもあるので注意。その場合は文の内容から判断すること。

※２　主格には命令される相手が入るが、多くの場合は省略が可能。

※３　本来好ましい、あるいは本来予想され得る事象の状態と作用の結果が反する時。
例　　その箱は叩いても壊れなかった。

※４
期待・好意に相手が動作を通して応える時や、命題に対して好意を持つ時に用いる。
例　kaU cane tar Ine　彼はそれを食べてくれた

※５　英語の"make~do~"と違い、英語の補語にあたる部分と動詞にあたる部分がくっついた形となっている。そのため、使役させられる対象・人物（英語のOの部分）が間接目的格となり、使役させられる事象（英語のCの部分）が目的格となる。
また、日本語における絶対自動詞は、ノフア語で「自らを～させる」の形を取るので、動詞はもとから使役態である。そのため、絶対自動詞再帰形の使役形は「AにBさせるようにさせた」という意味になる。

※６　主語は必ず複数形である。
対格がwaxenb（互い）の場合は、対格省略可能。

意味が伝わるのであれば、助動詞を連続・複合して用いることも可能。
助動詞の順序は日本語に準ずる。

態について

ノフア語の態

態	意味	構成
能動態	動作の主体に視点が置かれている。	助動詞無し、あるいはその他の態を示す助動詞以外の助動詞。
自発態	動作の受け手に視点が置かれているが、受動態と異なり、被動者が動作を行なっているとみなす。	非生物主語+自動詞表現。
受動態	動作の受け手に視点が置かれている。	受身の助動詞 renb。
交互態	複数の主語が動作主であると同時に被動者となる。	複数形主語＋交互の助動詞 naU、もしくは複数形主語＋動詞＋waxenb（お互い）

無主語文は受動態で表現する。

例　英語では主語が重視される　→　主語は英語で重視される

前置詞

前置詞は、本名詞と動詞、そして動詞を通して本名詞と節・句内の名詞がどの様な関係にあるかを示し、名詞の直前に置かれる。

他動詞原則から、動詞 wik（行く）の様に対格が「何処へ、何処に」との質問に応える形の動詞の場合、前置詞 ne を省略できる。省略しない場合は強調表現になる。

否定形前置詞と否定形助動詞が重複しても、二重否定から肯定にはならない。

前置詞	意味
時間に関する前置詞	
ta	「（特定の一点の時点で）～に」　何時に等、具体的な一点を指定する場合
fare	「～の前に」
fato	「～の後に」
Enita	「（時点 A から時点 B の）～の間」
EIma	「（ある範囲、期間）～の間」
Ena	「～中（ちゅう、じゅう）に」　今月中に、今年中など広く時間を指定する場合
Ikre	「（何時間、何日等の量的な意味で）～を超えて、以上」
kem	「～には」
tori	「（ある期間中）～を通して」
fori	「～から、～以来」
varak	「～を通り越して」
forem	「～以来ずっと」
ram	「～まで（ずっと）」
forenb	「～以内に」
条件に関する前置詞	
rak/ferak	「～なら」　後続する節が真なら、先行する節が真となる。用法としては、　例 E wik rak KaU wik の rak 以後が真なら、rak 以前も真である　という用法。 ／　「～でなければ」　後続する 節が偽なら、先行する節が真となる
ram	「～まで」　ある条件（後続する節）が達成されるまで、動作をしつづける
動作の様態（非位置）に関する前置詞	
ci/feci	「～で、～を用いて」　行為に伴った道具・手段を示す／「～を用いずに」　行為に指定された道具・手段が伴わなかったことを示す feci＋
mirto	「～に関して、～について」
ta	「～で、～において」
qaIq	「～に対して」
fem	「～に反して」
qeIm	「～に沿って、～に則って」　例　マニュアル、説明書

Enate	「～の間で」　特に類似したもの、同種の中で、の意味
wazma	「～の他に（も）」「～も同様に」
Enita	「（複数の選択肢等）～の間で」　例　パンと白米の間で悩む
Ikre	「～を超えて」　例　職権、権限
fori	「～から、～より」
ne	「～へ、～に、～まで」
qom/feqom	「～と共に、～を伴って」　人物や生物が伴うことを示す　／「～を伴わずに」後続する人物・生物が伴わなかったことを示す
totak	「～を除き」
kam	「～によって」　動作が後続する人物、生物、道具、手段等により達成されたことを示す
yare/feyare	「～の様に」　後続する節と比べたり、例としてあげたり、動作が行われる様が類似していることを示す　／「～の様ではなく」　後続する節と類似していないことを示す
nez	「～にとって」　多くの場合、be 動詞+形容詞に後続。be 動詞 nez 名詞 形容詞という語順になる。英語に例えると It is important to him→ It is for him important
qata	「～から離れて」　例　職務など
tori	「～を通して」
nenb	「～より～」　主に比較に用いる
Afe	「～為に」　目的
動作の様態（位置）	
fori	「～から、～より
ne	「～へ、～に、～まで」
ta	「～で」　開けた場所、敷地全体、概念（学校の建物ではなく、学校という概念）等を示す
Ufe	「～の上に」　指し示す物体同士が接している
Ufam	「～の上方に」　指し示す物体同士が接していない
Ikrexi	「～を横切って」
fato	「～の後ろに（を）、～の背面に（を）、～の奥に」
qaIq	「～に対して、～の対面に」
fem	「～の反対に」
qeIm	「～に沿って、～と並んで」
Enate	「～に囲まれて」
karak	「～の周りに（を）」
fare	「～の前に（を）、～の全面に（を）、～の手前に」
Ina	「～の下に」　指定されたもの同士が接している
Inam	「～の下方に」　指定されたもの同士が接していない
lxito	「～の側に、～の横に、～の隣に、～の傍に」
Enita	「～の間に（を）」
Ikre	「～を越えて」
Ena	「～の中に、～の内に、～の内側に」　建物・部屋の内部等を示す
lixa	「～の近くに」

qata	「～から離れて、～の遠くに」
taq	「～に接して」
varak	「～を通り過ぎて」
tori	「～を通って、～を通し」
nem	「～の方へ」

関係詞

関係詞とは、関係節の存在を示すマーカーとなる品詞である。
関係節とは、関係詞により導かれる一連の語の集まりであり、その中には必ず動詞が含まれる。
関係節には役割により名詞節、形容詞節、副詞節の３つがある。

名詞節とは、文中で主格と対格の役割を果たす節である。
英語における同格は、形容詞節であるとみなし、名詞節には含まない。
また、英語のおける補語も存在しない。主格補語はbe動詞sasが他動詞であること、対格補語は分詞と不定詞が存在しないことや、事実名詞節関係詞をあてることから存在しない。
基本的に、名詞節では関係詞を省略することができない。
それぞれの名詞節は、対応する格の代名詞のように振る舞う。それを導入する関係詞は、倒置された際に格マーカーがつく。

意味	形式
事実	saI+SV(IO)
分岐	saI+SV(IO)+mac+(IO)/na
人物・物体・非人生物	saI+(S)V(IO)

※英語において分詞と不定詞を用いて行われる対格補語の名詞節表現は、上記の理由から補語自体の不在故に存在しない。対格と対格補語全体を「事実」とし、事実名詞節関係詞を用いて表現する。
例　I saw him eat chocolate　→　I saw that he eating chocolateとして捉える

なお、全ての名詞節関係詞は文中で「疑問代名詞」として使うことができる。
名詞関係節を疑問代名詞に用いる場合、疑問文マーカーkeは省略してはいけない。

事実
日本語の「～こと、～の」に相当する。事実の名詞節関係詞は必ず名詞が続く。
例　Er qnem saI KaU tarete Ine　私は彼がそれを食べた<u>こと</u>を知っている

分岐
日本語の「～するかどうか」に相当する。ある動作及び事象が実現する・しないで分岐し得ること、またその動作の実現・非実現のどちらかが起きていることを示唆。事実と同じく、名詞が続く。
例　Er na qnem saI kaU tarete Ine mac na　私は彼がそれを食べたかどうかを知らない。

人物
日本語の「～する人、誰」に相当する。動詞による条件が提示され、その条件を満たす人物を仮定し、補う形で文中に入る。

例　Er qnem saI tarete Ine 私はそれを食べた人を知っている

形容詞節

形容詞節は、文中で名詞・代名詞の後ろにつき、先行する名詞・代名詞を修飾し、説明したり限定したりする役割を持つ。名詞節でも用いられる関係詞 saI を用いるが、全ての形容詞節関係詞は名詞に後続する（名詞節の場合、関係詞は代名詞のように振る舞う）。

形容詞節関係詞の格マーカーは、文中での格ではなく、詞節内での役割に応じてつけられる。

主格	所有格	目的格
saIsa	saIni	saIto

名詞節と同様で、人物・非人物以外の区別は無い。また、形容詞節内で動詞が動詞+前置詞の形を取る場合、その形容詞節の関係詞は目的格形である。

例　Ine sas Ixe saIto Er qmecemete　これは私が住んでいた家です。

英文法の様に、形容詞節に代名詞脱落（Ø 関係代名詞）は認められている。

制限用法と非制限用法
非制限用法　形容される名詞が特定される（話手と聞き手で共通の認識がある等）場合。
制限用法　形容される名詞が特定のものではなく、「形容されている条件にあてはまるものは全て」のニュアンスを持つ。
コンマで形容詞節をくくれば非制限用法に、くくらなければ制限用法になる。

副詞節

副詞節は文中で副詞としてはたらく節であり、動詞を修飾する。
副詞節は本来、最初から「副詞節」として定義されたものではなく、文法的に導き出されるに過ぎないものだった。その為、他の節の関係詞や、前置詞（肯定形のみ）等からの流用が多い。
英語の従位接続詞にあたるものの多くは、ノフア語においては副詞節関係詞である。
動詞のどの要素を修飾するかによって、いくつかに分類できる。

時間に関する副詞節関係詞	
tetoI	～するとき。
caktoI	～するとき。不定代名詞、「時」の条件形から。 tetoI との違い：「時間が特定されていない」、「副詞節内の動詞が未然」、「仮定形（例え何時であっても）」の場合に用いる

UletoI	～するときは常に。不定代名詞、「時」の全部形から
Ema	～する間。
fare	～する前。
fato	～した後。
fori	～以来、から。
kam	～までには。
ram	～まで（ずっと）。「～するまで～してはいけない」の様に、条件として用いることも可能。
sanbya	～するや否や。
	その他、動詞が「いつ」行われるかという質問・疑問に応える副詞・前置詞から始まる複合関係詞。
場所に関する副詞的関係詞 ※他動詞の原則から、多くが「be 動詞+形容詞」構文で用いられる。英語的用法では多くの場合「名詞節」を構成してしまう。	
texa	～する場所で。
cakxa	～する場所で。 texa との違い：「場所が特定されていない」、「副詞節内の動詞が未然」、「仮定形（例えどこであっても）」の場合に用いる。
Ulexa	～する場所は全て。
	その他、動詞が「何処で」行われるかという質問・疑問に応える副詞・前置詞から始まる複合関係詞。
理由に関する副詞節関係詞	
rEs	～何故なら～。文頭に来た場合は「～なので」
Oze	～として～。 例　校長として、生徒の安全を守らなくてはいけない。 様態にもなり得る。
条件・仮定・範囲・限定に関する副詞節関係詞	
rak	もし～なら。
Efra	～する限り～、～するなら。
ferak	～でないなら。
yaEf	～の（動詞する）限り～。 行為が継続することではなく、範囲により限定。私が知るかぎり、等。
目的に関する副詞的関係節	
Afe	～する為に。
nacaf	～しない為に、～しない様に。
結果に関する副詞的関係節	
tekonb	～する程～した（になった）。A tenkonb B で「B する程に A だった」
mamoz	～結果～した。A mamoz B　で「B の結果 A した」
譲歩・譲渡・逆説（非順当）に関する副詞的関係節	
dete	～にも関わらず、～のに・
Edi	～例え～であっても。
Ema	～する一方で～。
様態に関する副詞節関係詞	
yare	～の様に。
feyare	～と異なり～。

接続詞

接続詞は文同士、節同士、句同士、語同士の関係を示す詞である。
ノフア語における接続詞は、英語の「等位接続詞」にあたるものしかない。
英語の「従位接続詞」にあたるものは、ノフア語においては副詞節関係詞である。

接続詞は語と語、文と文等、同種のものを対等な関係で結ぶ。
文同士の場合、重文を成す。つまり、独立節同士を繋ぐ。

Onb	同じ品詞・形態の語・句を結ぶ。A Inb B で「A と B」もしｋは「A そして B」の意味。
Of	語・句・節同士、あるいは異なる要素同士を結び、A Of B で「A と B の両方、どちらも」を意味する。
Efna	語・句・節同士、あるいは異なる要素同士を結び、A Efna B で「A だけではなく B も」を意味する。
yanenb	目的格の語・句・節を結び、A yanenb B で「B よりも A を」の意味。
mac	前後の語・句・節のどちらか一方が対象となる・実現する。「A か B どちらか一方」「A もしくは B」の意味。
moc	前後の語・句・節のどちらか一方、あるいは両方が実現する。「A か B、あるいは両方」の意味。
nonb	独立節同士を並列関係で結び、両方（の述語）を否定する。「A ではなく、そして B ではない」
namac	先行する節の動詞が否定形（助動詞 na）の場合に、前後の語・句・節を結ぶ。「A も B も（動詞否定形）ない」の意味。
take	先行する句・節と後続する句・節が相反し、関係が順当でないことを示す。「A だが B」
rese	先行する句・節の結果として後続する詞が導かれることを示す。「A なので B」

文節接続詞

文節接続詞は、節・文同士のみを結び、話の展開を補助する接続詞である。文・節の頭にのみつき、文の頭につく場合はコンマが直後に入る。

文節接続詞	意味
neqce	順接。前の節・文の順当な結果として導かれることを示す。「したがって」
tade	逆接。前の節・文と文脈的に反することを示す。日本語の「しかし」
sima	並列。前の文と対等な事象としての文であることを示す。「また」
xiIne	添付・添加。前の節・文に付け加えることを示す。「そのうえ、更に」
cakiq	転換・無視。話題が変わることを示す（前後の文脈が関係無い場合）「ところで」、または前の文脈が無視されたことを示す。「それでも、とにかく」

また、文節接続詞の様に文頭につき、事柄（文）の順序を定める「順序接続詞」というものもある。

順序接続詞は文頭のみにつく。形状こそ他の詞（形容詞・副詞）だが、用法的に関係詞として扱う。

接続詞	意味
Iflik	一番目に、最初に。
Asifa	（まず）はじめに、はじめ。
xelik~（数＋lik）	◯番目に。
Exa	次に。
Atenb	（順序的な意味で）そして、そうして。
trase	最後に、終わりに。

感動詞

感動詞とは、感動・応答・呼びかけ・挨拶にあたる品詞であり、単独で文を構成することもできる。文全体の意味を修飾することができるが、それ自体が他の品詞に成り代わることはない。

感動詞固有の語を用いる場合と、名詞・動詞・形容詞・副詞を感動詞として用いる場合がある。

他品詞からの流用	
名詞	単独で用いる場合と"re"を名詞の後に置く場合がある。後者は対象となる名詞がその場に存在しない場合に用いることが多い。
動詞	pro 脱落する言語でありながら、動詞が格変化しないため、動詞を単独で用いることはできない。助動詞と併せてのみ用いることができる。
形容詞	moninb「良い、良いねぇ」、daninb「痛い！」　等。
副詞	単独で用いられる場合と、動詞とセットで用いられる場合がある。命令形の場合、副詞は必ず動詞に後続する。例　(ranb) Im yarlik「はやく来い」。
固有感動詞	
感動	AI（あぁ）、OU（おぉ、おう）、yas（よしっ、よっしゃ等の好ましい出来事のとき）、xik（くそっ、ちくしょう等の好ましくない出来事のとき）、Ara（なるほど、そうか等）
呼びかけ	qoI（おい、主に男性が用いる）、meI（ねぇ、主に女性が用いる）
応答	yaI（はい）、ya（うん）、nene（いいえ）、yoU（「はい」のくだけた言い方）、neIye（「いいえ」のくだけた言い方」
挨拶等	moninb Emra（朝の挨拶。おはよう、moninb Emra sasife でおはようございます） nimati sas（日中の挨拶。こんにちは、sasife でより丁寧な言い方） moninb noqto（日が暮れた後の挨拶。こんばんは。sasife を足すとより丁寧な言い方に） moninb Efa（おやすみなさい） mtanb（ありがとう。動詞の主語・目的語を省略した形。mtanife Ane でより丁寧に。） AIdanb（ごめんなさい） nacikem（どう致しまして） qenali（どうぞ） qatenera（いらっしゃい、いらっしゃいませ） EneUfim（おじゃまします） Imenera（いってらっしゃい） mainera（おかえり、おかえりなさい） xenima（ただいま） Imemif（いってきます） sarimExif（はじめまして） tarimenif（いただきます）

	moninb rename（さようなら、rename はくだけた言い方） matire（さようなら、近々会う場合） taknimata（久しぶり）
掛け声	SeI（さぁ、それっ等）
その他	qeE（えーっと、考え事をしている時、悩んでいる時など）、Ere（あらら、あれま、ありゃー、あちゃーなど、驚いた時・不本意・好ましくないときに用いる）、A（驚いた時、思い出したときの　あっ）

文の種類・文型

ノフア語において、文は四種類あり、それぞれ平叙文、疑問文、命令文、感嘆文である。英語の様に、疑問符・感嘆符が存在しないため、それぞれの種類は構成、語順、マーカーをもって区別する。

文の種類	構成・語順・マーカー
平叙文	・原則としてSV(I)O。 ・倒置時は一つの格を除き、全ての外の格の名詞にマーカーをつける。
疑問文	・疑問代名詞／名詞節関係詞と疑問文マーカーke（必ず文末につく） →疑問代名詞の場合はkeを省略可能、名詞節関係詞は必ずkeを用いる。 ・英語と違い、疑問文だからと言って文型は変わらない。 例　Ine sas qen　それはなに？ Ane wik ta qentoI　あなたはいつ行くの？ Ane tar wazma ke　あなたも食べますか？ →だが語順は比較的自由。倒置時の措置は平叙文と同じ。 ・語尾が上がる
命令文	・命令（禁止）の助動詞qera(nahqera)を用いる。 →命令される人物が明らかな場合は主格を省略可能。 ・動詞単独では不可。必ず助動詞を要する。 ・語順は自由。マーカーに関しては上の二つと同じ。
感嘆文	・文頭に疑問代名詞qenanb、文末に助動詞zate。 ・語順としては、qenanb－形容詞A／副詞A－（名詞目的格B）－主語C－動詞D＋助動詞zate。英語とほぼ同じ。 ・目的格の名詞が入る場合は「CはなんてAなBをDするのだろう」の意味、入らない場合は「CはなんてAなDするのだろう」の意味。 ・目的格の名詞が入る場合、その名詞か主語のいずれか、あるいは両方に格マーカーを入れる。入れた方は強調される。

文型

ノフア語において、実質的な文型はSVOかSVIOしかない（Iは間接目的語）。
これは、英語における補語が存在しない（他動詞原則、分詞・不定詞の不在）ためである。
しかし、代名詞脱落や（主に主格）、目的語の省略が認められていることから、表面上の分形は；
・V
・VI
・VO
・VIO
・SV

・SVI
・SVO
・SVIO
の８種類である。

その他の文法・表現

倒置（転置）法

ノフア語には「格マーカー」があるため、文法的に禁じられている場合を除き、文の語順をSVIOから異なる順にすることが可能である。倒置した際は一つの格だけ残し（※）、他の格の名詞全てにマーカーをつけなくてはならない。
基本的に、文・節の頭に来る語が強調される傾向にある。その語にマーカーがついていれば確実に強調される。
※その他の文法規則から格を導き出せる場合は省略可能。
例　Ufe riwa Er sdarete Enb
　・前置詞は必ず与格か対格の前に置かれる　→riwaは与格か対格
　・sdareteは絶対自動詞であり、ErとEnbの存在から再帰形で用いられているのが判断できる。
　・Enbは与格か対格の形しか取らず、絶対自動詞再帰形から対格であると判断できる。
　・よって、Erは主格、Enbは対格、riwaは与格だと判断できる。
詳しい内容は各項で説明している。

文の構成の差異による強弱判断、及びそれを用いた接続詞の省略。

文は、その構成により強度が決まる。そして、その強度の関係から、重文において一部の接続詞を省略（厳密には簡略化）することができる。
文の強度は、基本的に；
１）倒置文、全格にマーカー
２）倒置文、一部マーカー
３）通常文、全格にマーカーー
４）通常文、マーカー無しあるいは一部マーカー
の順に強い。
そして、文の強弱関係から、以下の接続詞を省略できる。

Onb（そして）	文A、文B（同じ強度）
rese（順接）	文A、Aより弱い文B
take（逆接）	文A、Aより強い文B